

# 地域行政関係者の留学生「国際観光ガイド」インターンシップ評価 — 大学と地域行政が挑む国際的地域力の創造 —

恒松直美

## 1. はじめに

本稿では、広島大学短期交換留学プログラム<sup>1</sup>留学生向けの「グローバル化支援インターンシップ」授業における「国際観光ガイド・インターンシップ」の実習に焦点をあて、留学生が地方にある歴史的資産を紹介する新しい試みに関しての地域行政関係者による評価について考察する。2014年2月、地域行政関係者と地域団体からの協力を得て、呉市倉橋町にある「長門の造船歴史館」において、5か国（中国・韓国・オーストラリア・ポーランド・ドイツ）出身の8人の交換留学生が「国際観光ガイド」実習を行った。日本の造船の歴史と造船技術の発展や日本の外交関係と倉橋町の歴史との関わりについて呉市周辺の人々に日本語と英語で紹介した。本企画の実現のためには、呉市行政との連携、地域団体や地域の人々とのネットワーク構築、日本の地域社会と協働していくための留学生の指導など、多角的視野からの授業マネジメントが必要となった。プロジェクトの企画・立案・実行に至る全行程において、担当教員が学外と連携し授業マネジメントを行うとともに、留学生インターンも担当教員の指導のもと地域関係者と企画の全般において関わった。提案から実習までの全行程で関わってきた地域関係者は、留学生インターンによる国際観光ガイド実習をどう受け止めたのか。地方にある歴史的資産を留学生インターンが国際観光ガイドとして地域で紹介する斬新な挑戦は、地方創生を現場で日々考えている地域関係者にどう受け止められたのか。本稿では、交換留学生「国際観光ガイド・インターンシップ」実習の企画全般に渡り協力と支援を提供した地域行政関係者による実習評価をもとに、本企画の教育的意義と地域行政との協働による留学生の社会体験が地域社会にもたらす影響について総括的に振り返る。

地域において留学生による国際的体験学習の場を構築するためには、地域行政と地域関係者による異文化理解の重要性の理解や多文化共生の地域づくりへの前向きな姿勢が不可欠となる。本企画は、2014年9月末に留学生が来日する前から企画の提案を市行政に行い、準備期間を経て2015年2月にガイド実習を行う長期的な取り組みであるが、その過程で実習を行った8人の交換留学生が地域関係者の目にどう映ったのかを探ることは、地域社会への留学生の参画の意義と課題を大学外の視点から認識する起点となる。

---

<sup>1</sup> 以後、「広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSAプログラム」と称する。

また、交換留学生在が文化多様性を活かし、地域活性化を目指す日本の地域で社会体験を持つ体験的学習がもたらす効果やその課題を模索する鍵となる。さらに、本実習は、地域の国際観光振興の施策や多文化共生の地域づくりの推進のために留学生の力を生かす国際的体験学習の方策を研究するアクション・リサーチの場ともなる。地域関係者による本実習の評価は、留学生が地域に参画するうえでの現実的課題のみでなく、地域社会が多文化共生を推進するうえでの障壁や問題も提示するものである。

## 2. 留学生の国際的体験学習を生かした多文化共生の地域づくりと国際観光振興

交換留学生在の持つ外国人としての知見と日本社会への強い興味を地域再生に生かし、地域社会の人々と連携しつつ地域と世界を結ぶプロジェクトを遂行する「地域国際観光プランナー」インターンシップを2014年度に開始した。<sup>2</sup> 地方にある歴史的資産を世界に開く挑戦として、2015年2月14～16日に、呉市倉橋町にある「長門の造船歴史館」において、5カ国出身の留学生8人による「国際観光ガイド・インターンシップ」実習を行った。留学生インターン8人の出身国は、中国・韓国・オーストラリア・ポーランド・ドイツで8人のうち6人が学部生で2人が大学院生である。実習では、造船歴史館において国際観光ガイドとして就労し、倉橋町の造船技術の歴史や地域史、日本の外交史を地域住民、呉市近郊の人々に日本語と英語で紹介した。同時に、同日開催された倉橋フェスティバルにも参加した。

HUSAプログラムに参加する交換留学生在は毎年9月末に来日し、10月開始の秋学期授業より授業を受講する。「グローバル化支援インターンシップ」授業の受講希望者は10月の第1週の授業で、「インターンシップ・プレースメントテスト」及び面接試験を受ける。日本社会で実務をこなすために必要となる日本語能力と社会人としての基礎的知識と応用力をテストするものであるが、テスト結果については厳しい評価基準を設けている。昨年度のテスト導入以来、厳格な判定では全員不合格で数名が補欠という結果であるが、原則、学生が受講を強く要望した場合は、基準を明確に説明したうえで受講を許可することとしている。2014-2015年度に本授業の実習を受講した8名の留学生の詳細を表1に示した。

現在、日本の観光振興を国際的視野から地域活性化と結び付ける議論がある。1963年に制定された観光基本法を全面改訂し、2007年に施行された観光立国推進基本法（国土交通省観光庁）<sup>3</sup>では、「国際競争力の高い魅力ある観光地の形成」（第12-14条）、「観光産業の国際競争力の強化及び観光の振興に寄与する人材の育成」（第15条・16条）、「国

<sup>2</sup> 交換留学生在「地域国際観光プランナー」インターンシップによる新しい地域活性化への留学生の支援については、恒松(2014)参照。

<sup>3</sup> 国土交通省観光庁ホームページにある「観光立国推進基本法（条文）」参照。

表1. 交換留学生インターン8人の特徴（国・専攻等）

国	韓国・中国・オーストラリア・ポーランド・ドイツ（5か国）
性別	女子学生4人・男子学生4人
学部・大学院	学部生6人・大学院生2人
専攻	文化人類学・情報テクノロジー・日本語・日本研究・政治学・国際ビジネス
日本語能力	上級レベル6人・中級レベル2人
英語能力	母国語者1人・英語上級レベル2人・英語中級レベル5人
日本語ガイド	中国・韓国・ドイツ出身（5人）
英語ガイド	オーストラリアとポーランド出身（2人）

際観光の振興」（第17条・18条）を掲げ、現在の日本への観光についての国際的対応が不十分であるとの認識のもとに国際競争力の高い国際観光の推進が提唱されている。地域創生の施策が日々検討される中、国際観光は重要な意義を持ち、外国人観光客の訪日促進の施策に関する実習であれば留学生の力が発揮できる。国際観光ガイド実習は、留学生が日本の地方の国際観光振興に関わる体験を通じて多文化共生の地域づくりに貢献しつつ、「顧客的扱い」を脱却して地域に参画する困難を学ぶ体験となった。

本実習での取り組みは、総務省が推進する地域における多文化共生の推進のための施策とも重なる。平成18年3月、総務省が「多文化共生推進プラン」を発表し、地域で多文化共生を推進する人材の育成と活用が提唱されてきた。「地域における多文化共生推進プランについて」（総務省ホームページ）では、地域における多文化共生の意義として、(1) 外国人住民の受け入れ主体としての地域、(2) 外国人住民の人権保障、(3) 地域の活性化、(4) 地域の異文化理解力の向上、(5) ユニバーサルデザインのまちづくり、の5点を挙げている。また、地域における多文化共生の推進に係る具体的施策を、(1) コミュニケーション支援、(2) 生活支援、(3) 多文化共生の地域づくり、としている。本「グローバル化支援インターンシップ」で取り組んだ国際観光ガイド実習は、交換留学生が地域社会の行事に「主体」として参画する多文化共生の地域づくりの第一歩である。本実習では、留学生インターンがガイドの場面において自身の調査も盛り込み、新しい視野から日本の歴史を紹介する場面もあり、倉橋町の観光ボランティアガイドの解説のみに頼らない、質の高いアクティブ・ラーニングの場となった。

### 3. 地域・行政との協働による留学生「国際観光ガイド」実習の企画

呉市倉橋町「長門の造船歴史館」における「国際観光ガイド・インターンシップ」

企画を実現させるためには、担当教員と行政及び地域関係者との連携が不可欠であった。Kasim & Al-Gahuri (2015)は、研究者は研究するコミュニティに対し相互依存の関係と平等なパワー関係を構築しつつ良好な関係を築き信頼を得ることが必要となると述べる (Emmel, Hughes, Greenhalgh, Sales, 2007; Rist, 1981)。本授業で企画する「地域国際観光プランナー」は、大学の国際教育と地域社会の相互支援を目指してきた。行政と地域からは留学生に日本の地域の人々と協働で仕事に取り組む社会体験の場を提供し、留学生インターンは外国人の知識を生かした国際的体験学習によりエンパワーメントする平等なパワー関係の構築である。図1には、2014年5月の企画提案から2015年2月の実習までの大学・行政・地域関係者の協力による段階的な発展の経過をまとめ、表2にはその過程の詳細内容を示した。

図1. 本企画に関わる地域・行政との協力体制の構築と企画準備の過程



表2. 本企画の提案から実行までの段階的発展の詳細

時期	2014年5月	2015年6月	2015年7月	2015年8月	2015年10月	2015年11月	2015年2月
会議・セミナー	「地域国際化セミナー」	長門の造船歴史館「国際観光ガイド・インターンシップ」企画提案	長門の造船歴史館「国際観光ガイド・インターンシップ」企画内容の検討	文部科学省推進「子供見学デー」倉橋町の皆様との地域国際交流会	「呉市倉橋長門の造船歴史館の国際的広報の施策」公開国際セミナー	長門の造船歴史館「国際観光ガイド・インターンシップ」研修合宿詳細決定	長門の造船歴史館「国際観光ガイド」実習・倉橋フェスティバル参加
場所	広島大学国際センター	呉市役所倉橋まちづくりセンター	呉市役所産業部観光振興課	広島大学国際センター・倉橋まちづくりセンター	広島大学国際センター	呉市役所産業部観光振興課	呉市倉橋町「長門の造船歴史館」・倉橋まちづくりセンター周辺

図1及び表2に示した大学と行政・地域の段階的発展の重要部分について以下に述べる。

**\* 呉市倉橋「長門の造船歴史館」国際観光ガイド・インターンシップ企画会議**

(2014年6月・7月 呉市倉橋町まちづくりセンター・呉市役所産業部観光振興課)

2014年6月に倉橋まちづくりセンターにおいて、呉市産業部観光振興課を中心とし、呉市産業部海事歴史科学館学芸課・倉橋観光ボランティアガイドの会・倉橋まちづくり公社を含む呉市関係者と会議を持ち、本企画の提案を行った。7月には、観光振興課において10月に開始予定の本実習の企画の詳細の検討を行った。

**\* 「倉橋長門の造船歴史館の国際的広報の施策」国際セミナー (2014年10月広島大学)**

10月末に「倉橋長門の造船歴史館の国際的広報の施策」公開国際セミナーを開催し、呉市役所産業部観光振興課、呉市倉橋まちづくりセンター、倉橋まちづくり公社、倉橋

観光ボランティアガイドの会から参加を得、学生による施策提案を行い、フィードバックを得た。留学生インターンを2つのグループに分け、「倉橋（長門）島における歴史の物語ツアー企画」、「倉橋造船歴史館の国際化について」の2つのテーマで発表を行い、新しいアイデアを提示した。自ら造船歴史館を事前訪問して見学し提案をまとめる積極的な態度を見せた留学生もいた。

＊「国際観光ガイド・インターンシップ」会議（2014年11月 呉市産業部観光振興課）  
2月14日～16日の3日間の合宿の詳細内容とスケジュールを決定するための会議を担当教員・インターン留学生代表2人・呉市関係者（観光振興課・海事歴史科学館学芸課・倉橋観光ボランティアガイドの会）で開催した。造船歴史館でのガイド実習の詳細スケジュール・2月15日の倉橋フェスティバルのステージ出演の内容・倉橋の土産品とマスコットの投票と開票結果発表の3つの仕事の流れについて協議した。また、呉市によるバス送迎と宿泊施設（呉市役所産業部農業技術拠点センター）提供について確認した。

＊「国際観光ガイド」実習に向けた事前準備（2014年12月～2015年2月）

ガイド実習に向けた準備として、1) 倉橋の造船技術の発達と日本の外交の歴史に関する資料収集（歴史館訪問と館内のビデオ撮影・倉橋町史の文献の貸借）と各学生による歴史調査、2) 館内1～3階の各展示品についてのガイド内容の要点のまとめと経路の書類作成(図2)、3) ビデオ閲覧による各自の準備学習と練習、4) 授業での予行演習、5) 呉市と倉橋町での広報（「呉市政だより」掲載など）を行った。学生の焦点がガイドの準備に集中する中、集客のため市行政担当者・造船歴史館関係者・担当教員が直前まで訪問客を集めるため動く結果となった。

図2. 長門造船歴史館での移動経路とガイドの解説内容（学生による準備資料作成）

倉橋 長門の造船歴史館 国際観光ガイド 順番と要点 「グローバル化支援インターンシップ」(授業担当: 恒松) 文責: 金哲 (2015 January 23) 1 <sup>st</sup> Draft	
入り口	・旗手自己紹介 ・造船歴史館の背景紹介。(1) ・二階へ上る前に靴を落とす。
二階右側	外 ・船のデッキ上まで行って、船はいつ作ったか、長さ と幅、マストの高さを紹介(2)。作者の紹介。(3) そして、靴を落として、屋内へ戻る。 展示室 ・左から順番に説明する。 ・各地方の説明文。(4) ・船の模型。(5) ・造船器具。(6) ・最後に右側にあるおおきな模型、について説明。(7) ・三階に上がる
三階通路	・まずは鳥籠の遣唐使船を紹介、船の漕ぎ方を紹介。 (8) 乗船者の紹介。(9) ・遣唐使船と安芸の国。(10) ・遣唐使。(11) ・遣唐使船の航路。(12)
二階左側	展示室 ・遣唐使船小さい模型を紹介。竹の櫓を紹介。(13) ・朝貢品と回賜品の紹介。(14)「注文のお頼み」な ど。(15) ・古代の船模型について説明。(16) ・旗について、殿沢半三郎の改善した洋式ドックを紹 介。(17) 下の展 示室 ・黒船事件がきっかけの船作り。(利彦船・倉橋丸)(1 8) ・船たんすについての紹介。(19) ・開船について説明。(20) ・設計図(紙図と板図二種類)。(21) ・大阪堺の住吉大社は海の神様、遣唐使船キャビンは 住吉大社を真似して作っている。(22)
一階右側	展示室 ・地図。(23) ・厳島神社管弦楽模型。(24) ・船王(船の守り神)。(25) ・設計図(紙図は見積書も兼用している)。(26) ・エンジンを載せた船: 奴型機帆船。(27) ・板を蒸す箱により、木船の底の弧ができる。(28)
入り口	最後の挨拶。

長門の造船歴史館ガイド具体内容

・鳥島呉市にあるこの長門の造船歴史館は平成4年(1992)年に創  
造船の造船の歴史を紹介する。造船と海運業に関する資料、復元され  
船等がある。  
唐使船の大きさは、長さ30m、幅7～9m、排水量約300t、帆  
平底箱型。鉄釘はほとんど用いず、平板を継ぎ合わせて作った。  
階にあるこの遣唐使船は倉橋の人たちが倉橋の誇りある造船技術を用  
したものである。  
船匠: 唐船匠は、つころう(漕う)派ともよばれ、「芸藩通志」には  
ど、豊田氏が渡海用の船を作ったところと記している。  
ヶ首警固所跡: 鎌倉時代中期以後、商品流通が活発し、瀬戸内海を航  
が増してきた。これに伴い、海賊も横行するようになり、鎌倉幕府  
禁圧例を出した。各地の要衝には、警固役所が置かれ、安芸の国では  
東備、龜ヶ首に置かれた。  
見山: 近世(江戸時代1600～1867年)の瀬戸内海航路が「地  
から「神楽」に変わっていき、広島藩は、宝永8年(1709)から  
(1777)まで遠見山に番所を設け、番人を派遣した。  
老渡港: 瀬戸内海の要地に当たる港であった昔、韓使の往復のたびご  
地に寄港していたので韓停(からどまり)とかいたのが韓門(からと)  
次第に現在の鹿老渡の地名になった。  
葉集造船長門島松原: 倉橋島は、古くは長門島と呼ばれ瀬戸内海交通  
あり、風待港、潮待港として遣新羅使船や遣唐使船が寄港していた。  
(736)に派遣された遣新羅使はこの地に停泊し、歌を8首残した。  
浜式船渠跡: 日本で最初の洋式ドック、殿沢半三郎により改善。  
「船の地形はとてども造船にあつている。海岸の底では、岩の断層でとて  
大型船の作りにもとても良い。  
型船模型: 船渠跡に使用される観船で、イワシ綱を引き上げる時な  
となる船である。  
型船模型: 船渠跡に使用された小舟で、船底は三枚の板からでき横  
安定している。また、船首が尖り、二丁櫓で漕ぐため速く進む  
仔舟: 本船と港の間、運送。  
船模型: この船は、実際に底引き漁を行っている漁舟の模型である、  
に綱、チヌである。  
を作るための道具、木を彫る、形を整えるものなど多くある。  
ずは木を掘って、板で船の形を作り出す。そして、板と板の隙間  
き込む。楡と皮を剥き、そして叩いて繊維状にして、紐を作り出す。  
隙間の中に叩き込んで、水の中に入ったら、水分を吸い込んで膨らむ、  
それ以上に水を通さないようになる。こうすることによって、防水で  
ある。  
の進行方向に沿って、右を右舷と呼び、左を左舷と呼ぶ。遣唐使船の

2月14～16日の3日間の実習の内容は、1) 国際観光ガイド、2) 倉橋フェスティバルのステージ出演、3) 倉橋のお土産とマスコットの提案への投票依頼と開票結果発表、である。実習のスケジュールを表3に示し、仕事の詳細を説明する。

表3. 「国際観光ガイド・インターンシップ」実習の流れ(2015年2月14～16日)

日程	その日のテーマ	午前(9時～12時)	午後(12時～4時)	夕刻(4時～)
2月14日(土)	国際観光ガイド・予行演習	移動(東広島～呉市倉橋町)	国際観光ガイド予行演習	反省会・館内掲示の準備・夕食準備
2月15日(日)	国際観光ガイド & 倉橋フェスティバル参加	「長門の造船歴史館」国際観光ガイド	国際観光ガイド・「倉橋フェスティバル」ステージ出演(自己紹介と投票発表)・土産とマスコット投票依頼	反省会・夕食準備
2月16日(月)	呉市産業部観光振興課の企画による呉市民バスツアー	「長門の造船歴史館」国際観光ガイド	バスツアー参加者との交流会・反省会と地域関係者からのフィードバック	移動(呉市倉橋町～東広島)

### 1) 呉市倉橋町「長門の造船歴史館」における国際観光ガイド(2月15・16日)

2月14日(土)は予行演習と準備を行い、2月15日(日)は、約1時間の日本語と英語によるガイドを午前と午後に各1回ずつ行った。16日(月)は、市民が留学生のガイドを聴く「国際観光ガイドバスツアー」を呉市産業部観光振興課が企画して募集した(14名参加)。15日と16日の2日間は造船歴史館を無料で拝観可能とした結果、両日の造船歴史館の訪問者数は合計127名となった。

### 2) 呉市「倉橋フェスティバル」のステージ出演(2月15日)

本年度で第17回目となる「倉橋フェスティバル」のステージに倉橋観光ボランティアガイドの会のメンバーと一緒に出演し、ガイドの予定紹介とインターン考案の倉橋町の土産への投票依頼を行った。会場では、地域団体がテントを設営し、地域の特産物や調理品の販売を行った。午後のステージでは投票結果を発表した。地域関係者の報告では2015年度の参加者数は約1万2千人とされている。ステージ出演では、観客を巻き込みつつ留学生の地域での活躍についてアピールした。

### 3) 倉橋の土産とマスコットの投票依頼(倉橋フェスティバル会場)

ガイドを担当する合間にフェスティバル会場において交代で倉橋町の土産などの投票の依頼をして回った。集計結果は、遣唐使船36票、犬14票、猫9票(マスコット品3点)で、スマートフォンケース34票、布鞆12票、Tシャツ10票(お土産品3点)であった。

## 4. 地域行政関係者による評価

### 4.1 調査対象者の背景と調査方法

本調査の分析対象を2014-2015年度「グローバル化支援インターンシップ」授業の「国際観光ガイド・インターンシップ」企画に協力・支援を提供した呉市行政関係者及び地域関係者とする。2014年5月の企画提案から2015年2月の実習まで、本企画の実現に向け支援をした呉市産業部観光振興課職員2名・呉市議会議員・倉橋観光ボランティアガイドの会会員の4名に評価をお願いした。4名の年齢は30代~70代で職務経験や経歴は多岐に渡る。市行政に関わる仕事、海外と関わる企業体験、他県での就労体験や移住の経験、日本に滞在する外国人と関わる仕事の経験、大学時代の留学経験、起業経験や市議会議員としての経験、地域におけるボランティア活動の経験など4人の社会経験は多種多様である。<sup>4</sup>

実習終了から数週間後の2015年3月、呉市役所の会議室において1対1の1~2時間のインタビューを行った。実習の評価シートを持参し、その場で各評価項目を1~4の4段階（1. できなかった、2. あまりできなかった、3. 少しできた、4. 大変よくできた）で評価をお願いし、各項目について半構造化インタビューを行った。自由な発言を促すため、項目に捉われず感想や意見を自由に述べていただくようお願いした。インタビュー開始前に、秘密を厳守し、本人であることが特定可能な形で論文等に記載しないなど、プライバシーには十分配慮する点を明確に伝えた。インタビューはその場でコンピューターに記録した。

### 4.2 調査内容と分析方法

評価項目は、過去12年間の交換留学生向けのインターンシップの授業開発と企画・運営における様々な経験をもとに、留学生が行政や地域の人々と協働で企画を実行するために必要となる能力・技能・知識を総合的に捉える項目を設定した。評価する内容は、地域関係者が留学生インターンと関わった本「国際観光ガイド」実習に関連する全行程とした。「評価カテゴリー」として、1. 日本語・日本文化、2. 他者との連携、3. 仕事の理解、4. 人間関係形成能力、5. 異文化理解、6. 汎用的技能、の6つを設定した。さらに、「評価カテゴリー」を「評価項目（概要）」に分類し、その下位概念としてより詳細に分類した「評価項目（詳細）」を設定した。「評価カテゴリー」・「評価項目（概要）」・「評価項目（詳細）」を表4に提示した。

---

<sup>4</sup> 地域関係者へのインタビュー対象者を本企画の協力者の代表4名に絞った。少人数であることに鑑み、匿名性を保つため、各人に関する詳細情報は伏せることとした。

表 4. 地域関係者による「国際観光ガイド」実習に関する評価項目

評価カテゴリー	評価項目(概要)	評価項目(詳細)
1. 日本語・日本文化	①日本語能力	企業・市役所等との電子メールでの連絡
		企業・市役所等との電話対応・仕事における日本語使用
2. 他者との連携	外部と連携する力	日本社会の内・外や上下関係を意識した対応
		地域企業・市役所等の訪問・会議時の儀礼 地域企業・市役所等との電話・メールによる連絡
3. 仕事の理解	仕事についての理解	担当する仕事の目的・目標の理解
		仕事の内容と流れの理解
4. 人間関係形成能力	留学生インターン間の連携・地域の人々との連携	チームワーク能力・協調性
		人間理解・他者と円滑に人間関係を構築する能力
		決断力(チームの中で決定を導く力)
		責任感(責任感を持ってメンバーと仕事を進める力)
5. 異文化理解	異文化コミュニケーション能力	文化や価値観の多様性の受容
6. 汎用的技能	①礼儀作法・マナー	挨拶
		身だしなみ
		実習中の言葉づかい
	②知識応用力(実行力・能動的行動能力)	自分の持つ知識を仕事に活かす能力(情報リテラシー)
		テクノロジーを活用する能力(PCなど)
		創造性・新しいアイデアを生み出す力
		問題を理解・把握する能力・課題発見力
		問題解決力
		仕事を計画する力(計画力)
	③態度・志向性(社会人基礎力・就職基礎能力)	論理的思考力
		活発な討論能力
		リーダーシップ・積極性
		他のインターンに働きかける力
		情報を他のインターンに発信する力(発信力)
		チャレンジ精神・探究心
		ストレスコントロール力・忍耐力
		元気・明るさ
		分からないことを質問し教えを請う態度

全評価項目に関し4名の評価者による各項目の4段階評価の数値を図で示した。匿名性を保つため、「社会人」1~4とし、番号で評価点を示した。各人の評価の数値を提示することで地域関係者による実習の捉え方の違いを比較的に考察することを目的とした。評価点の解釈で留意すべきは、各人の人生経験や職業経験等により留学生への期待値に相違があることである。地域社会の慣習や行動様式をどの程度留学生が理解して行動することを期待するかの評価基準は各人により異なる。各評価者が持つ評価基準の違いが点数の差異やインタビュー内容に反映されている現実に留意して分析した。

## 4.3 分析結果

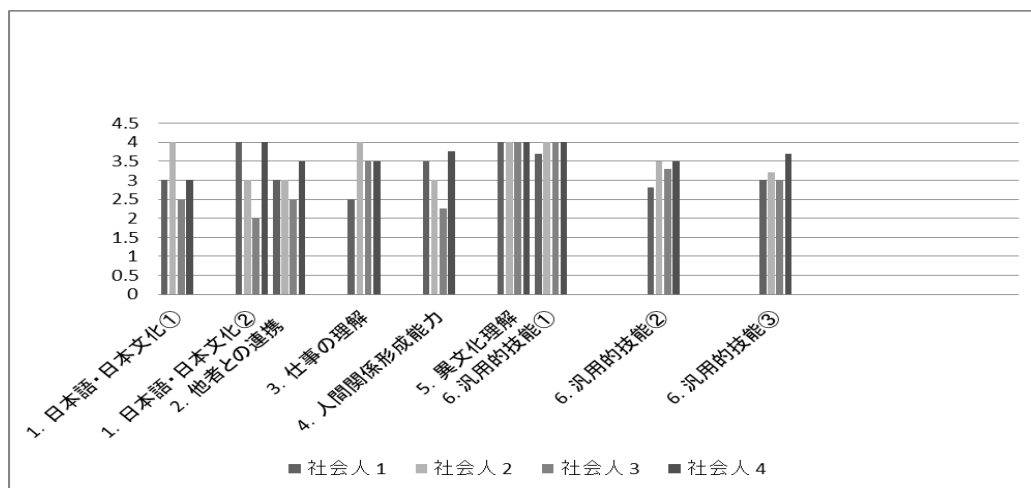
### 4.3.1 地域関係者による評価点の分析

各地域関係者による評価点について考察した。自己評価点に基づき、「評価カテゴリー」の下位概念の各「評価項目(概要)」に関する各人の4段階評価の点数を図3に示した。「評価項目(概要)」の下位概念の「評価項目(詳細)」がある項目については「評価項目(詳細)」の平均点を提示した。例えば、「1.日本語・日本文化」の「評価項目(概要)」である「1)日本語能力」の場合、評価項目(詳細)の「企業・市役所等との



電子メールでの連絡」と「企業・市役所等との電話対応・仕事における日本語使用」の2つの平均点を提示した。

図3. 各評価者による各「評価項目（概要）」の評価点



「1. 日本語・日本文化①」, 「1. 日本語・日本文化②」, 「2. 他者との連携」に関しては、評価に偏りがある。外国人でありながらもここまで努力したと評価するか、教員や地域関係者の支援なしに通用するかを厳しく評価するかにより評価点にばらつきが出ている。

「5. 異文化理解」は全員が4点をつけているが、インタビューでは「表面的」と指摘があったように、外国人留学生在が日本文化を理解しようと努力する姿を高く評価している。社会人1の評価者が、「仕事の理解」や「汎用的技能」に関し厳しく評価した背景には、本企画の提案から実行まで企画に関わり、学生が主導を握るよう担当教員が厳しく指導する姿を継続的に観察したことが考えられる。インターンが自主的に能力を発揮して実行したとの評価は現実的でないとする認識が読み取れる。

#### 4.3.2 インターンへのインタビューの分析

次に、インタビュー内容について考察する。4人へのインタビュー内容を項目別に整理しまとめた表を作成した。その一部を抜粋し、表5に提示した。

以下に各評価項目（概要）ごとの考察結果を示した。

##### ① 日本語・日本文化

###### 1) 日本語能力

日本語能力については、「日本人のレベルに達していた」、「日本人より礼儀正しい」、「メールは外国人と話している感じがしない」、「日本人よりも丁寧」など、学生が授業で習得した社会人と対話するための敬語使用や高度な日本語能力について高く評価している。「敬語をうまく使って人を不快なような言葉遣いは全然聞かなかった」、「ことば、

一生懸命、努力していた」と礼儀正しい態度が評価されている。「よくできた人とできなかった人がいる」のように日本語中級の留学生について現実的な評価があったが、「特に気をつけたほうがいい、ということは見当たらなかった」のように礼儀正しい態度を示したことが評価されている。

## 2) 日本文化理解

留学生に「どこまでを求めるか」によることや、「日本人のようにしろとは言えない」は、異文化圏の人と仕事で接触した体験から、留学生を日本人のように行動させることが非現実的であるとの見解である。留学生が地域社会と連携する実習で、日本的な行動様式と留学生の文化的価値観との折り合いをどうつけるかの理論的課題を投げかけている。日本の地域社会と関わる留学生のインターンシップ実習では、留学生を「日本人化」する方向性をとるか異文化と日本文化の融合点を見つけ整合性を模索する方向性をとるかは常に課題であり続けている。理論的課題は、実習現場として多文化社会で共生する力を皆がつけることを目指す方向性と地域で現実的に協力を得るために要求される日本文化的行動様式の整合性がとれない厳しい現実である。

日本語能力については評価される傾向にある一方、「内輪の见えないところは理解できないのでは」、「ヒエラルキーも分からないのでは」、「役職を見ても分からない。目に見えないところは分からない」のように、表面的な上下関係は理解できても、地域にある複雑な人間関係の中で構築されるヒエラルキーや内と外の関係を理解したり、そこで期待される行動様式と慣習を理解して行動するには到底至っていない現実が指摘された。

### ② 他者との連携（外部と連携する力）

「礼儀はしっかりしていた」と述べる人もある一方、「日本人に求める者は無理」のように、現実社会で日本人が日々行うような文化理解をすることは不可能であるとの見解があった。「目上の人に対する要求であるとか、お願いことであるとか、それに対する感謝の気持ちを言葉で表すとか、非常によくてきた」、「感心した」と礼儀は高く評価されている。実習の準備段階で、地域と連携するための礼儀の重要性について厳しく指導したことが生かされている。ガイドの予行演習で日本語でない言語で雑談をしていたことが気になったとのコメントがあり、教員が不在の場でのマナーについては注意を喚起する必要がある。

### ③ 仕事の理解（仕事について理解）

「先生のアドバイスがなければ理解できない」の通り、インターンは自ら仕事を把握して主導的に動くことが少なく、事前会議やガイド実習現場で、教員の支援に頼る態度があったことは否定できない。「こなすだけで精一杯。余裕がない。本来は、お客さんを

楽しませることが重要」「また来てほしいと思ってもらうことが（ガイドの）やりがい」という地域の観光ボランティアガイド育成に従事してきた行政職員からの指摘は、インターンが展示品の説明や歴史解説をこなすことばかりに気を取られていた現実への批評であり、ガイドという仕事の意義を勉強するなど、従事する仕事の意義を学ぶ重要性の認識を促すものである。「時間管理あまかった」、「守らなければならないことを理解しなくてはならない」は、社会人との協働企画では、大学での学生としての甘えが許されないことを学ぶきっかけとなる。

表 5. 評価に関する地域関係者へのインタビュー内容（一部抜粋）

評価カテゴリー	1. 日本語・日本文化		2. 他者との連携		3. 仕事の理解	
評価項目概要	日本語能力	日本文化理解	外部と連携する力		仕事について理解	
評価項目詳細	企業・市役所等との電子メールでの連絡	企業・市役所等との電話対応・仕事における日本語使用	地域企業・市役所等の訪問・会議時の儀礼	地域企業・市役所等との電話・メールによる連絡	担当する仕事の目的・目標の理解	仕事の内容と流れの理解
社会人1	日本語、日本人のレベルに達していた。	Xさん、日本人より礼儀ただし、印象深い。		特に褒れた人はいたが、気にされることもない。不快感を感じるほどでもない。		先生のアドバイスがなければ理解できない。
社会人2	メール、外国人と会話している感じが無い。メールの文章も、むしろ日本人よりも丁寧な。返したりなかったのはすまなかった。先生に頼りきってない、と感じた。		どこまでを求めるか、日本人のようにする、とは言えない。人によって捉え方が異なる。私も外国人と接する機会があるので、文化の違いが分かるので、自分自身も苦労した部分もあった。自分が言った時に、どうか、と向こうが思った部分もあるのかな。徐々にいいのではないのか。住んだ経験とかも影響する。いろんな日本人と関わってほしい。外国人といったら、身に付かない。	礼儀はしっかりしていた。	お客さんを楽しませようという力、ガイドとしての力。こなすだけで精一杯。余裕がない。本来は、お客さんを楽しませることが重要。完璧であることは重要だ、と思うが、また来たい、と思われることが大切。また来たいと思うボランティアガイドと関わってきている。また来てほしい、と思ってもらうことがやわやわしい。厳しいレベルを求めるのであれば、お金を払って行けばいい、よりの高いレベルを求めるのであれば、お金を払って民間に行ってもらおう。少数のために動く。	
社会人3			内輪の見えないところは理解できないのでは？ ヒエラルキーも分からないのでは。役職を見ても分からない。目に見えないところは分からない。	日本人に求めるものは無理。		時間管理あまかった。流れは理解していたのだから、守らなければならないことを理解しなくてはならない。
社会人4	とてもよかったです。できなかった人かいる。Kさん、Rさん、よくできました。*＊相対的に、特に気がつけたほうがいい、ということは見あたらなかった。	言葉遣い丁寧で、敬語を使うのが上手。敬語をうまく使って上手に話していた。Rさんは、電話で、当日、調理場で話をしたり。あの方とはあまり話す機会はない。Rさんが、話をそばで聞いていた。敬語をうまく使って人を不快なような言葉遣いは全然聞かなかった。日本語かなり勉強。ことば、一生懸命、努力していた。不快、ということ、全然なかった。	会議では、場内で、私語を発したり、無駄な言葉をはいたりしていた。Rさん、前を向いて話を聞いていた。	しっかりできていた。敬語を上手に使う、というのは、2)にあてはまる。私、という立場を理解されて、そのような言葉遣いで、目上の人に対する要求であるとか、お願いごとであるとか、それに対する感謝の気持ちを言葉で表すと、非常によかったです。これは全員に言えるのではない、私は感心した。不快な思いをする、ということ、あまりなかった。ただ、しいて辛口で言わしていただければ、会議中に、ほかの言葉を二人で話したり、ガイドの予行演習の時、話をしながら、[*]二人で笑った。	日本語ガイド、英語ガイド、ちゃんと準備から自信に至って、きちんとしたり、やっていた。ステーションもきちんとしていた。それぞれが自分の担当することをきちんとやっていたので。	

- ◆ 「[\*]」は、インタビュー内容で匿名性を保つため省略したことを示す。
- ◆ 「\*＊」は、その部分に他のコメントがあり省略したことを示す。

#### ④ 人間関係形成能力（留学生インターン間の連携・地域の人々との連携）

「積極的に人と関わろうとする姿勢に見えなかった。自分から積極的にいろんなことを質問したりしていない」、「リーダーを決めていたのだろうか。リーダーが動いているように見えなかった」からインターンの態度が消極的に映ったことが分かる。日本社会における上下関係と的確な敬語使用を授業で学んだが故に、恐れが消極的態度をもたらした部分もあったと考える。「もっといろんなことを聞いて欲しかった。せっかくこういうふうに関わることができるので」のように意欲的に支援を望む声もあることを留学生が認識できる場を創ることが相互理解を深めることになろう。また、2泊3日の合宿で2人が私用を理由として1泊で帰宅した行動について、公的授業の実習での態度として疑問視する見解があった。

「チームワーク、協調性うまくやっていた」という声がある一方、「外国人同士。何を気にしているのか」、「個人個人みたいな気がする。チームとしてやらなくてはならない重要性が理解されていないのでは」からは、チームをまとめる統率力の不足とインターン全員によるチームワークの認識の不足が伺える。「日本。皆で協力。しない人は村八分。農耕系。日本人はどうして仕事ができるのか。」には、集団主義と特徴づけられいつのまにかグループで仕事を成し遂げるように映る日本社会の行動様式が、留学生インターンの行動には観察できなかったとの見解である。宿泊先での「解放されて私生活に戻る」場について、「晩ご飯はチームワークなし」、「分担とか話していればちゃんとできるであろうに」から、皆が協力する意識の共有が不足していたことが分かる。多文化性を持つ留学生チームがチームワークを形成し、学生間でもリーダーシップを発揮できるシステムをどう構築するかが課題である。

#### ⑤ 異文化理解（異文化コミュニケーション能力）

「異文化理解」の解釈が回答者により異なる。「国際ガイド、コミュニケーションとりながらやっていた」のように、留学生インターンが訪問者と歓談しつつ造船の歴史を伝えたことへの評価がある一方、「日本の文化をどの程度理解しているか、というより初めての体験でむしろ文化を知るためにいろいろやったように思う」、「異文化の理解ということになると、初めての体験。日本文化を体験しに来た、という感じ」では「異文化理解」を「日本文化理解」と解釈している。日本文化の理解を地域社会の現場で試す体験であり、理解度を測るレベルに達していないとの意見である。異文化理解が「表面的」という批評は、基本的知識を大学で学術知として学んだに過ぎないとの厳しい意見である。

## ⑥ 汎用的技能

### 1) 礼儀作法・マナー

「おおむね、感じよかった。皆がそうではなかった。不快感ではないけれども、ものすごい礼儀正しい人、普通（の人）」には、学生の礼儀の差が読み取れる。「表面的な挨拶、身だしなみ、できているが、空気を読むところできていない」は、ありきたりの礼儀はできている、場面に応じて状況判断し動く力はないとの社会人レベルからの指摘である。

### 2) 知識応用力（実行力・能動的行動能力）

「国際ガイド、よく勉強している。年齢的なことを考えてもいいかな、と思う。よくやっていたと思う。」は、学生としては高く評価していいという見解である。「(倉橋フェスティバルの)ステージ、あれだけ発表、すごい」は、約 500 人の観客を前にしたステージで留学生が倉橋の土産品の提案を発表した勇気ある姿への評価である。また、留学生らしさを生かして地域在住の人々とは異なる形で力を発揮したことが評価されている。ガイドを聴いたタイの滞在経験をもつ訪問者が新しい視点が聞けて喜んでいただとのコメントには留学生の新しい知見の提供が評価されたことが分かる。「デザイン能力。自分の能力をいかんなく発揮している、と思う。日本人は持っているも、出し惜しみする人がいる。やったらいい、と言えない。謙譲の美德。」「しがらみなく、商品のアイデアを出してくれている。」は、地域内の関係性に捉われず自由な発想で地域活性化に貢献する力を持つ留学生の可能性への期待である。「成り行きでやっていた」「計画（できない）、先生の指導なしに」には、仕事を総括的に見て自ら行動するには至っていない現実の指摘である。

### 3) 態度・志向性（社会人基礎力・就職基礎能力）

「国際感覚、広大に生かしてもらって」、「発信力、留学生同志でも発信（すれば）、こちらもやりがいがあったと思える」など、留学生の力の活用への期待の声があった。チャレンジ精神については「今回のことやった自体、評価できる」、「ガイドもすごいし、舞台であれだけのことをしただけでも」、「私に色々なことを聞いてきた。予行演習の時も、当日もきいてきた。」と挑戦への意欲を評価しつつも、「積極性が足りなかった。こっちからお膳立てする」、「活発にものを言う人と、あまり発言しない人と」、「8人で分散している。自分のことだと思っていない」、「Xさんに言われなくても自分で率先してできたのか」、「リーダーとして全員に指示を出す司令塔にはなっていない」には、積極性や責任感の不足と企画成功に向けメンバーを動かすには至っていないリーダーシップの欠如が指摘されている。

## 5. 結論

本企画の実習は、地域行政関係者と地域団体のネットワークをもとにした支援を得て実現可能となった。留学生インターンが外国人の知見と日本文化理解を生かすことで地域関係者と対等な関係性に立ちエンパワーメントしつつ社会体験を持つ実習を目指したが、実際には地域行政関係者による本企画の教育的価値の理解と企画全般への支援が不可欠である。「(地域ボランティア) ガイドさんと留学生の関わりができた。ガイドの人にとっても視野が広がった」、「(ガイドに) 留学生に関心を持ってもらいたい」など、地域で観光ボランティアガイドを目指す人々と留学生の接触が新しい知識創造をもたらすとの行政関係者の意見があった。行政関係者が「やりがいを感じた」との意見や、「倉橋を一過性にせず、何か工夫ができれば」、「継続して欲しい。地域活性化には若い人の力がある。倉橋も活性化したい、という気はある。でも自分からやろうと言う人はいない。」など、地域活性化の場で留学生の活躍が期待されていることが読み取れる。

地域関係者からの評価に基づき、本実習の課題として、1) 地域と連携する実習での積極的態度の育成、2) 留学生インターン間のチームワークとリーダーシップの育成、3) 表層的でない日本文化理解をもたらす学びの場の構築、4) 地域社会における留学生の異文化性と日本文化性との整合性の模索、5) 仕事の本来の意義についての考察、6) 実習において留学生の価値を生かす施策、が挙げられる。大学と地域が持続可能な形で相互支援により教育現場を構築し続けた時、理論に基づく改善の施策が見いだされると考える。また、現実的改善のためには、地域関係者による指導的助言を受けられる実践教育の場を作ることが不可欠となる。大学と地域社会との連携における現実的課題は、1) 留学生が地域行政や地域の活動にどう参画する可能性をもつのかの協議、2) 留学生の参画のためには大学と地域行政が具体的にどう関わるかの協議と実践に基づく模索、が必要となる。最も困難な課題は、ネットワーク構築をしつつ試行していくために担当教員と地域関係者にかかる多大な労力と時間である。

川村(2003:52-54)は、ネットワーク組織のキーパースンの役割とは、1) ネットワークが直面する課題の解決に貢献する新たな知識(視点、解釈、実践)の創造(野中ほか、1990、野中・竹内、1996)と、2) ミクロ・マクロ・ループを通じたネットワークの自己組織化(今井・金子、1988)を促進することにあると論じる。留学生と地域をつなぐ本企画では、担当教員が地域行政の支援を得てネットワークを自己組織化し、信頼関係を構築しつつ、地域社会と留学生をつなぐ価値の提示とその方策の創造的提案を行った。川村(前掲)は、自己組織化の例として、最初は支援される立場にあった外国人が、正統的周辺参加を通じ市民を支援する立場・意識へと変化するプロセスに見出せると述べているが、本企画では、担当教員の指導のもと留学生インターンが地域の支援を得て企

画を遂行したが、支援を提供する立場にはなっていない。

また、川村（前掲）は、異文化間教育のための地域ネットワーク組織におけるキーパーソンの役割の一つとして、独自の新たな知識を資源とし承認やコミットメントを含む必要資源を獲得し、「ネットワーク組織に固有のバルネラビリティ、弱連結、脱公式化のマネジメント」を行いつつ、自己組織化を促進していくことを挙げているが、多文化組織としての地域関係者を含むネットワーク構築では、脱公式化のマネジメントにより、各状況に適応した形で必要資源や人の力を活用していくことが必要となる。従来の枠に捉われず、固定的な活動や関係性に固執せず柔軟に人をつないでいくキーパーソンが地域行政と地域団体に必要となる。

地域ネットワーキングの要素として、1) 活動の中での実感（リアリティ）であり問題意識、2) ベクトル（活動の方向性）を同じくする人達が問題や課題を共有できる「場」の設定と議論のプロセスによるネットワーキングの深まり、3) 活動のフィードバックによる、考えや立場の異なる人たちの相互理解とネットワーキングの可能性の拡大を川村（前掲）は挙げる。本企画を通じて留学生の自由な発想が日本の公的領域に表れた時、生きた外国人が提示したものとして地域関係者は実感を持ち、課題を共有する場が生まれた。今後の課題は、異なる経験と立場におかれつつも課題を共有した関係者が相互に見解を出し合う場を創り、留学生の異文化性が大学の教育的空間から地域社会に移された時に生じる偏見や軋轢についても協議しつつ現実的施策を検討していくことであろう。地域行政関係者による留学生の実習の評価から見えてきた問題や課題は、逆の発想で見れば、現在、日本がグローバル化社会で直面している異文化理解の課題とも認識できる。本稿で提示した日本社会で仕事をする地域行政関係者による実習評価は、留学生の持つ異文化性と日本文化性との整合性の難しさをつきつけると同時に留学生の持つ力を地域で生かす新しい可能性と課題も提示している。

## 引用文献

川村尚也（2003）「異文化間教育のための地域ネットワーキングにおけるキーパーソンの役割 - 組織論の視点から -」『異文化間教育』第18号， pp.47-59.

国土交通省観光庁ホームページ「観光立国推進基本法（条文）」

<http://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/kihonhou.html>(2015年2月4日閲覧)

総務省ホームページ「地域における多文化共生推進プランについて」（平成18年3月）

[http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota\\_b6.pdf](http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b6.pdf)(2015年5月9日閲覧)

恒松直美（2014）「交換留学生『地域国際観光プランナー』インターンシップ -

新しい地域づくりと地域活性化への留学生の支援 -」『広島大学留学生教育』第18号，

pp.47-61.

Kasim, Azilah, Hussein Abdulqader Al-Gahuri, “Overcoming challenges in qualitative inquiry within a conservative society”, *Tourism Management* 50 (2015) 124-129.

## 謝辞

本企画の実現にあたり御理解と多大なる御支援をいただいた呉市産業部観光振興課課長神垣進氏及び呉市関係者の皆様に深く感謝の意を表します。本企画において私達と共に真摯な努力を続け挑戦しつつも不慮の事故により帰らぬ人となった姿婷さん（中国東北師範大学出身）に心から感謝と哀悼の意を表します。